

親鸞聖人の涙に導かれて

森村 森鳳

1 野間宏

野間宏先生は戦後派文学の代表的な作家です。野間宏先生の父親は、浄土真宗の一派を立て、自宅で念佛の道場を開いて、門徒を持ちました。その影響で野間先生は幼いころから念佛して、仏教を信じてきました。しかし、父親が亡くなると、一家は貧しさに直面しました。その中で父の仏教を、社会の矛盾や失業の問題などを解決する力のない偽善的なものとして、疑問を抱くようになりました。そして親鸞の教えを否定しようとしていました。しかし、否定しようとしても、親鸞に惹かれつづけ、晩年は、親鸞の思想を伝えるために、力を尽くされました。

2 歎異抄の言葉

その一

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。（中略）他力をたのみたてまつる悪人、もっとも往生の正因なり。

（『歎異抄』第3章 聖典初版 627～628頁〔第2版 768～769頁〕）

その二

さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし

（『歎異抄』第13章 聖典初版 634頁〔第2版 776頁〕）

意味： そうなるほかない業縁が働きあらわれるならば、誰でもどのような行いもするであろう。

その三

わがこころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし（『歎異抄』第13章 聖典初版 633頁〔第2版 776頁〕）

3 黒五類と紅五類

黒五類：共産党以前の地主や富農、資本家、そして共産党政権下で「反革命分子」や「右派」とされた人々とその家族

紅五類：労働者や貧しい農民、革命に関わった幹部や軍人、そして命を捧げた烈士とその家族。

4 「非業の死を遂げた者」

殺人の方法の残虐さ：リンチや残虐な体刑といった。如何なる法律執行の形式も採られていない。刀でたたき斬る棒で殴り殺す。縄で絞殺す。石でたたき殺す。溺死させる。……あ

りとあらゆる手段が使われた。勝手放題で気違いじみたやり方が猛威を振るうということは人類史上無かった。(宋永毅編・松田州二訳『毛沢東の文革大虐殺』原書房 2006年1月)

5 造反派

「造反派」は、毛沢東の「造反有理」という言葉より生み出された文革用語です。「造反有理」とは「造反に理があり」の中国語、既成の秩序を破壊する者こそ正義であるという意味です。文化大革命で掲げられたスローガンの一つです。

6 野間宏の指摘

(親鸞は) みずからひろく農民庶民大衆とともに生きるなかで、罪を犯し悪行をせざしては生きることのできない広範な大衆は、自力聖道門などによって救われるわけがないこと、他力浄土門による以外、絶対に救いをもつことができないことを、身に徹して知らされたのである。 (野間宏著『歎異抄』筑摩書房 1969年5月 48頁)

農民のなかでの新生活をすすめたとき、この「白道」は、やはりついに前人未踏の道としてみずから切り開かなければならないものとして見えていただろう。そして親鸞はついに全力をつくしてそれを切り開いたのである。

(野間宏著『親鸞』岩波書店 1973年3月 151頁)

7 総序の言葉

聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

(『教行信証』総序 聖典初版150頁〔第2版160～161頁〕)

8 後序の言葉

悲喜の涙を抑えて由来の縁を註す。

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。これに因つて、真宗の詮を鈔し、浄土の要を摭う。ただ仏恩の深きことを念じて、人倫の嘲を恥じず。もしこの書を見聞せん者、信順を因とし疑謗を縁として、信楽を願力に彰し、妙果を安養に顯さんと。

(『教行信証』後序 聖典初版400頁〔第2版475～476頁〕)

9 二尊の大悲に縁りて、一心の仏因を獲たり。

(『淨土文類聚鈔』 聖典初版421頁〔第2版501頁〕)

10 円融至徳の嘉号は、惡を転じて徳を成す正智

(『教行信証』総序 聖典初版149頁〔第2版159頁〕)